— 1 —

奴隷制の米国への拡大

ニューヨークの国連本部に展示されている古代の遺物の中に、キュロスの円筒印章の複製がある。キュロスの円筒印章とは、紀元前539年前後にさかのぼる文書で、バビロニアを征服したペルシャ帝国のキュロス大王にちなんで名付けられたものである。キュロス大王は、臣民に、今日公民権と呼ばれている権利の多くを保証した。その中には、信教の自由、個人の財産の保護なども含まれていた。またキュロスは、奴隷制は「全世界で根絶されるべき伝統である」として、これを廃止した。

歴史を通じて、個人としての国民の保護および特権を、国家がどれだけ広く定義するか、そしてどの程度強く擁護するかは、各国家によってさまざまに異なってきた。米国は、こうした公民権、独立宣言に記された高い理想と合衆国憲法で制定された法的保護、そして最も重要なことに、その合衆国憲法の修正第1条～第10条の修正条項、すなわち米国民の権利章典を基盤として築かれた国家である。

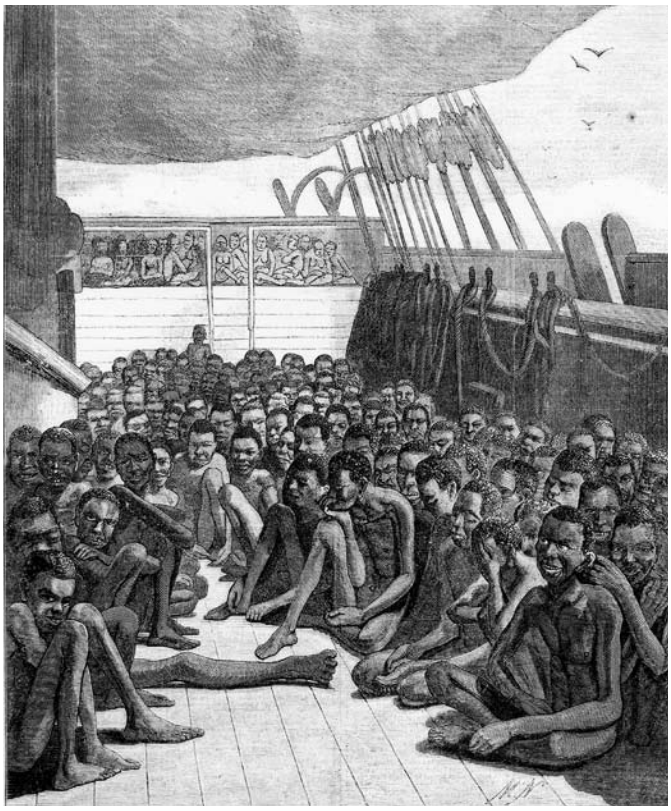
ところが、米国に到着した人々の中で、こうした権利と保護の恩恵を受けなかった集団がひとつあった。ヨーロッパからの移民が、新世界でかつてない経済機会とより大きな個人的、政治的、宗教的な自由を享受する一方で、アフリカの黒人は、多くの場合鎖につながれるなどして、自らの意志に反して輸送され、動産である奴隷として売られ、特に米国南部の大規模農園で「主人」のために強制的に労働させられた。

この冊子では、こうしたアフリカ系米国人の奴隷たちとその子孫が、他の米国人の享受する公民権を法的にも実質的にも勝ち取るためにどのように苦闘してきたかを詳しく述べる。それは尊厳に満ちた忍耐と闘争の物語であり、偉大な英雄たちを生んだ物語である。また米国人の大半に対して、平等や公正という彼らの普遍的な原則と、何百万もの同胞が直面する不平等、不公正、および抑圧との間の恥ずべきギャップに正面から取り組まざるを得なくすることによって、最終的に達成された勝利の物語でもある。

米国に移植された世界的な現象

人間は、有史以前から自分たちと同類である人間を奴隷としてきた。隷属の条件はさまざまだが、奴隷労働は、メソポタミア、インド、および中国の古代文明、古代のギリシャやローマ、そしてコロンブス以前のアメリカのアステカ、インカ、マヤの各先住民帝国に存在していた。聖書によると、エジプト人はヘブライ人の奴隷を使い、ヘブライ人自身もエジプトを脱出した後で奴隷を使った。初期のキリスト教やイスラム教も奴隷制を認めていた。アフリカ北部および東部のアラブ人はアフリカの黒人を奴隷とし、エジプトとシリアは地中海地域のヨーロッパ人を捕らえたり奴隷商人から買ったりして、主として、砂糖製造の労働力として使った。また多くのアメリカ先住民の部族は、戦争で捕虜にした他部族の先住民を奴隷とした。

大西洋を挟んだ奴隷貿易は、いくつかの要因が組み合わさって促進された。1453年にオスマン帝国がコンスタンティノープル（今日のイスタンブール）を征服したために、貿易パターンが乱され、甘い物好きのヨーロッパ人にとって貴重な砂糖を手に入れにくくなった。ヨーロッパ人はポルトガルの主導でアフリカ西海岸を探検し、アフリカ人の奴隷商人から奴隷を購入し始めた。1492年にクリストファー・コロンブスが新世界を発見すると、ヨーロッパからの入植者が土地を開拓するために大勢のアフリカ人奴隷を輸入し、特にカリブ海地域ではサトウキビの栽培に奴隷を使った。間もなくカリブ諸島は、西欧の砂糖需要のおよそ8割から9割を供給するよ



小型帆船ワイルドファイア号の甲板上のアフリカ人奴隷たち（1860年4月、フロリダ州キーウェスト）

カリブ海のアンティグア島でサトウキビを刈り取る奴隷たちを描いた 1823 年の作品

うになった。

今日の世界では理解しにくいことだが、かつての世界経済においては、砂糖、タバコ、綿花、香辛料などの作物が極めて重要な役割を担っていた。例えば、1789 年には、小さな植民地サン・ドマング（現在のハイチ）がフランスの外国貿易総額のおよそ 40％を占めていた。大西洋の奴隷貿易を推し進めようとする経済の力は強大なものだった。少なくとも合わせて 1000 万人のアフリカ人が、「中間航路」の苦難に耐えた。（中間航路とは、アフリカへの織物、ラム、製造品輸出、米州への奴隷輸出、およびヨーロッパへの砂糖、タバコ、綿輸出から成る三角貿易に使われた大西洋の航路のうち２番目のもので、最も長い航路であった。）アフリカ人の大半は、ポルトガル領ブラジル、スペイン領中南米、および英領・仏領カリブ諸国の「砂糖諸島」に送られ、アフリカ人のうち英国領の北米に送られた奴隷は、全体のわずか６％前後にすぎない。しかし、アフリカ系米国人の体験は、米国を建国し拡大した他の移民たちの体験とは大きく異なっていた。

奴隷制の確立

奴隷が最初に北米の英国領に到着したのは偶然の結果であった。1607 年に英国の最初の永久植民地として設立されたバージニアのジェームズタウンに、その 12 年後、カリブ海でスペイン船から捕獲した「ニグロ 20 人余り」を乗せた私掠船が入港した。入植者はこの「貨物」を購入した。それが米国における最初の奴隷である。

その後 50 年間は、新しいバージニア植民地において、奴隷たちはとりわけ顕著な労働力とはならなかった。上流階級の地主たちは、「年季奉公」の白人労働力を使うことを好んだ。年季奉公契約に基づいて、ヨーロッパからの移民がアメリカへの交通費を雇い主から借り、その借金を返済するために数年間働くことに同意した。社会学者のオーランド・パターソンによると、この時期、人種間の関係は比較的親密であった。きわめて少数ではあるが、特に有能な黒人が、自由を得て自ら富を築くことさえあった。

しかし、17 世紀後半からは、奴隷の値段が下がるとともに、年季奉公契約の移民志望者が減少した。奴隷労働者の価格が年季奉公労働者の価格より低くなるに従い、奴隷制が拡大した。1770 年までには、アフリカ系米国人が米国南部の植民地人口のおよそ 40％を占め、サウスカロライナではその割合が過半数に達した。（北部の植民地にも奴隷はいたが、北部では奴隷人口が全体の５％を超えることはなかった。）これだけ大勢の、抑圧されて反乱の可能性を秘めた少数民族の存在に直面して、南部の上流階級は、アフリカ系米国人に対する社会の姿勢を硬化させることを奨励した。奴隷である女性の子どもは奴隷とされ、奴隷主は奴隷を罰する際に奴隷を殺してしまってもよいとされた。そしておそらく最も重要なことに、バージニア州の白人エリート層は、経済的にあまり豊かではない白人労働者と黒人とを分断させる手段として、黒人に対

する人種差別を推進し始めた。

アフリカ系米国人の奴隷の大半は、メリーランド、バージニア、ノースカロライナの各州ではタバコ、深南部ではコメといった主要作物の農場で働いていた。1793年に、米国の発明家イーライ・ホイットニーが綿花から種を除去する綿繰り機を発明したことによって、深南部各地で綿花栽培が飛躍的に拡大し、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスの各州へと西方に広がった。1790年から1860年までの間に、およそ100万人のアフリカ系米国人が西へ移動した。これは、アフリカから米国へ運ばれた奴隷の人数の2倍に近い。

奴隷たちの生活とさまざまな制度

アフリカ系米国人の奴隷は厳しい労働を強制され、極めて苛酷な条件下で働かされた者もいた。州によっては、奴隷法と呼ばれる法律に基づいて、規則に従わない奴隷に対する厳しい懲罰が認められていた。1705年のバージニア州の奴隷法には次のように定められている。

> 本領土内のニグロ、ムラート（ヨーロッパ系とアフリカ系の混血）、およびインディアンの奴隷はすべて（中略）不動産と見なされるものとする。奴隷が、（中略）彼を矯正している主人に抵抗し、かかる矯正中に殺害された場合、（中略）その主人は（中略）かかる事故が発生しなかったかのように、いかなる懲罰をも免れるものとする。

またこの法律では、奴隷は、所属する農園から出る場合には事前に許可書を得なければならないと定められていた。そして、微罪に対しても、むち打ちを行う、焼き印を押す、重傷を負わせるなどの懲罰が認められていた。奴隷に読み書きを教えることを禁じた法律もあった。ジョージア州では、この規則に違反した者が「奴隷、ニグロ、または有色の自由人」であった場合には、罰金かむち打ち（またはその両方）の刑が科された。

米国の奴隷たちの運命は厳しいものであったが、彼らの物理的な労働条件は、ある意味では、当時のヨーロッパの労働者や農民の多くが耐えねばならなかった条件とそれほど変わらなかった。しかし、ひとつ違いがあった。奴隷たちには自由がなかったのである。

基本的人権を拒否されたことは、アフリカ系米国人の政治的・経済的前進の障害となったが、これに対して奴隷たちは独自にさまざまな力強い制度を作り出し、後に20世紀半ばの公民権運動がこうした制度から滋養と社会的資本を得ることになった。初期の記録では、奴隷が白人の主人の「影響下にある」幼児化された存在として描かれることが多かったが、現在では、多くの奴隷コミュニティにおいてある程度の個人的・文化的・宗教的な自律性が切り開かれていたことが分かっている。歴史学者のユージーン・ジェノビーズは、「奴隷たちは、人間らしく行動しなかったのではなく、ひとつの民族としての集合的な力を自覚して政治的な人間として行動することができなかったのである」と書いている。しかし、ジェノビーズの結論によると、ほとんどの奴隷は、「危険な状況に屈従させられていたにもかかわらず、成人男性および女性としての自らの資質を開発し主張する手段を見つけた」

その手段のひとつが「黒人教会」であった。時とともに、キリスト教を信じるアフリカ系米国人の奴隷が増え、特に南部の白人の間で有力だったバプテストやメソディストなどの宗派の信者となる奴隷が多かった。キリスト教の教義が奴隷制の正当性を弱めることを恐れた奴隷主もいたが、奴隷が教会へ行くことを奨励する奴隷主もいた。ただし、奴隷たちは教会の中でも「黒人専用」の席に隔離されていた。

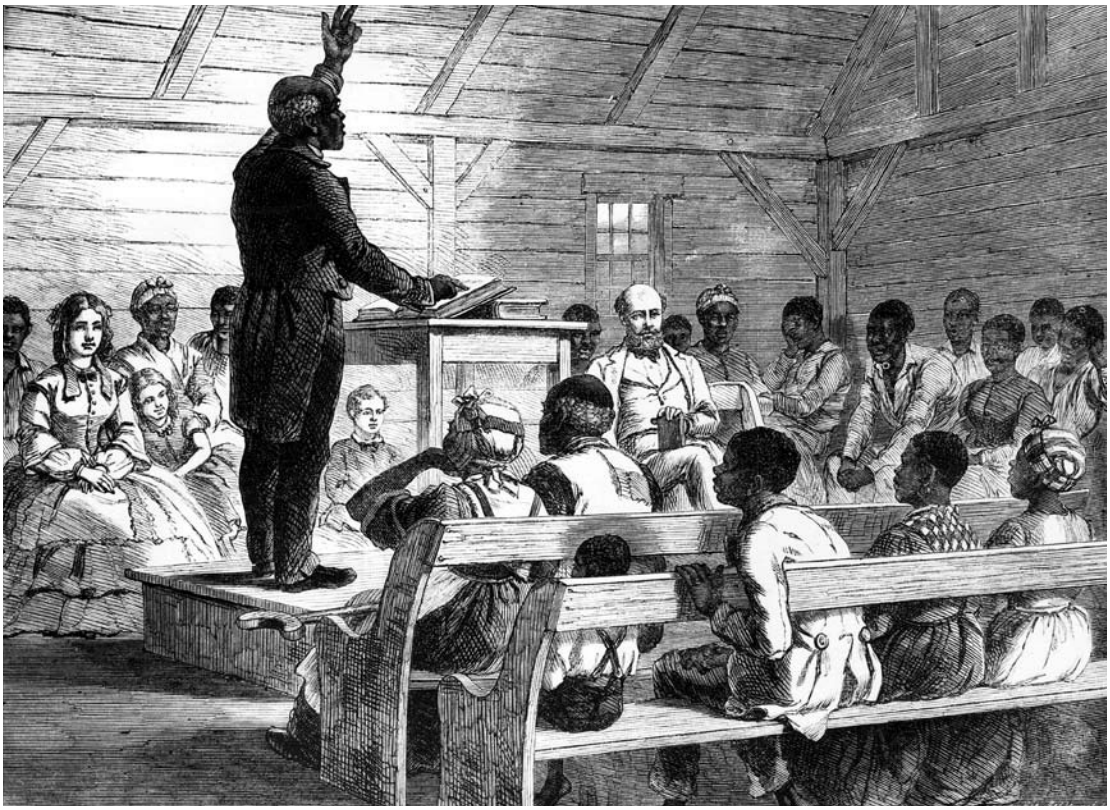
キリスト教に出会った多くの奴隷たちは、やがて独自の地下教会を設立した。これは主に、キリスト教と、奴隷たちのアフリカでの宗教文化や信仰を融合したものであった。その礼拝は、通常、叫びや踊り、そして後にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師をはじめとする指導的な黒人牧師の偉大な説教に顕著に見られるようになる「呼び掛けと応答」という形式を取り入れたものであった。黒人教会では、南部の白人教会におけるキリスト教の伝統とは異なる側面を強調することが多かった。例えば、南部の白人教会では、聖書のハムの呪い（「兄弟たちのしもべらのしもべとなれ」）が奴隷制を正当化するものと解釈されたのに対し、アフリカ系米国人の礼拝では、モーゼがイスラエル人を捕囚の身から脱出させた話が強調された。

アフリカ系米国人の奴隷たちにとって、宗教は、ある程度の慰めと希望をもたらすものであった。南北戦争によって奴隷制が廃止されると、黒人の教会や各宗派の組織は、信者数、影響力、組織力共に拡大し、これが後に公民権運動の成功に極めて重要な役割を果たすことになった。

家族のきずな

奴隷の家族の強いきずなも、同様に力の源泉となった。奴隷主には奴隷の家族を分散させる権利があり、事実そうする例が多かった。夫が妻から、また親が子から引き裂かれ、他の奴隷主に売られた。しかし分断されなかった家族も多く、「奴隷制の下での核家族の顕著な安定性と強さと持続性」に多くの学者が注目している。通常、奴隷たちは、拡大家族として暮らしていた。歴史家のC・バン・ウッドワードによると、奴隷の子どもたちは、少なくとも「子どもとして暮らすことを保証され、英国やフランスでは労働階級の子どもたちが鉱山や工場で働くことを強いられた年齢を超えても、労働と困窮を免れていた」

アフリカ系米国人の家族構造は、奴隷制や、後には差別と経済的不平等がもたらす困難に適応したものであった。多くの場合、黒人の家族単位は、小規模な血縁者の家族ではなく、拡大された一族に近かった。しっかりした強い女性が中心的な権威を持つ存在となっている場合もあった。奴隷が家族で



サウスカロライナのプランテーションで、白人と黒人から成る信徒に説教をする黒人牧師（1860年ごろ）

暮らしていれば家族離散を恐れて不服従や反抗の可能性が低くなると考え、こうした家族のきずなを奨励する奴隷主もいた。

いずれにしても、家族や一族の強力なきずなが、アフリカ系米国人の生き残りに貢献した。カリブ諸島の植民地やブラジルでは、奴隷の死亡率が出生率を超えていたが、米国の奴隷の人口増加率は、白人のそれと変わらなかった。1770年代までには、北米の英国領における奴隷のうち、アフリカで生まれた者はわずか5人に1人となっていた。米国が奴隷の輸入を禁止した1808年以降も、米国の奴隷人口は120万人から、1861年の南北戦争直前には400万人に増加した。

アフリカ人は奴隷制によって米国に連れてこられ、ヨーロッパ生まれの米国人が享受した自由を与えられなかった。しかし、束縛されていても、多くのアフリカ系米国人は、強力な家族のきずな、そして信仰に基づく制度を築き、後の世代が公民権運動の勝利を達成するための基盤を作った。ローザ・パークスがバスの前部の席に座るはるか前に、そしてマーティン・ルーサー・キング・ジュニアがその有名な夢によって米国民を鼓舞する1世紀以上も前に、自由と平等を求める闘いは始まっていたのである。

黒人教会の特質

アフリカ系米国人の宗教共同体は米国社会に極めて大きく貢献しているが、中でも、20世紀の公民権運動の精神的・政治的・組織的な基礎を築き、ローザ・パークスやマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師など公民権運動指導者の考え方を形成したことは特筆に値する。

アフリカ系米国人の奴隷と自由人は、18世紀半ばから後半にはすでに独自の宗教的な集団を形成していたが、奴隷解放後は、本格的にいくつかの宗派が出現した。今日「黒人教会」と呼ばれているものは、古い歴史を持つ7つの主な宗派から成る。それは、アフリカン・メソディスト監督教会（AME）、アフリカン・メソディスト監督シオン教会(AMEZ)、クリスチャン・メソディスト監督教会（CME）、米国ナショナル・バプテスト連盟（法人）、米国ナショナル・バプテスト連盟（非法人）、プログレッシブ・ナショナル・バプテスト連盟、およびチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストである。

アフリカ系米国人奴隷の解放後に出現したこれらの宗派は、主としてメソディスト、バプテスト、およびペンテコステ各派の伝統を受け継いでいたが、アメリカン・カトリック、聖公会、統一メソディスト教会などとつながる特色もかなり見られた。

アフリカ系米国人の宗教的感覚の優れた特質は、共通のアイデンティティーを築こうとする力である。黒人奴隷はアフリカのさまざまな地方から「中間航路」で大西洋を渡って米国に運ばれ、奴隷として強大な圧迫に耐えた。そうした出身地の多様性と社会的なはく奪を背景に、アフリカ系米国人の宗教的信条と慣習は、心の慰めとなるとともに、根深い対立を解決する手段、すなわち市民的不服従と非暴力という手法の知的基盤を提供した。また黒人教会は、黒人の政治活動家に、選ばれた少数に一時的な緩和を与えるのではなく、すべての人々に最終的な解決策を与えることに集中する、という強力な思想を与えた。公民権運動は、このような考え方に基づき、いかなる人間をも組織的に抑圧することを決して許さないことを目指した。従って、公民権運動の特質は、悲劇的な歴史を理解し、自らのためだけでなく国家と世界のために前進しようとするアフリカ系米国人の宗教共同体からあふれ出た自然の流れであった。

要するに、奴隷制とそれに続くジム・クロウ（黒人差別制度）に対して何らかの形の抵抗が行われるのは必然であったと思われるが、そうした状況において、抑圧を受けながらも共同体としての高い精神性を求めた黒人教会が、後に平和的な手段で目標を達成しようとした公民権運動の誕生に一役買ったのであった。

公民権運動の有力者たち、すなわちキングをはじめ、連邦議会のバーバラ・ジョーダン下院議員、ジョン・ルイス下院議員、政治活動家でバプテスト派の牧師でもあるジェシー・ジャクソン、伝説的なゴスペル歌手のマヘリア・ジャクソンといった人々の考え方は、主に黒人教会での信仰生活を通じて形成された。事実、公民権運動の主な発言者としてのキングの役割は、米国において、アフリカ系米国人の宗教共同体と人種的・社会的正義を求める闘いが直接結び付いていたことを反映している。アフリカ系米国人の宗教共同体の精神的な影響力は、米国内だけにとどまらず、ネルソン・マンデラやデズモンド・ツツ大主教といった国際的な指導者たちも、アフリカ人そしてキリスト教徒としての愛に満ちた包括的なアイデンティティーを体現することをキングから学んだ。

今日でも、アフリカ系米国人の共同精神は、これまでにも増して強力であり積極的である。黒人教会は、HIV・エイズのまん延、貧困改善の必要性、そしてアフリカ系米国人の囚人の不釣り合いに高い再犯率といった今日的課題に取り組んでいる。しかし現在もその精神性の基盤となっているのは、共通のアイデンティティーの追求である。初めてのアフリカ系米国人大統領が選出され、高等教育を受ける少数民族が増えている今、共通のアイデンティティーを求める旅は正しい方向に進んでいると言える。

要約すると、黒人教会は、アフリカ系米国人が最も厳しい抑圧の中で生き延びることを助け、普遍的な共同精神を求める画期的な呼び掛けを展開した。黒人教会は、単に民主主義の理論を語るだけでなく、民主主義を実践した。黒人教会の根から、独創的、包括的、そして非暴力的な公民権運動の花が咲いたのである。

マイケル・バトル

マイケル・バトル師は、デズモンド・ツツ大主教によって叙任され、ロサンゼルス監督教区のセントポール大聖堂の主席司祭および神学者（教会法）を務める。著書に、『The Black Church in America - African American Spirituality』などがある